

令和 4 年度 大学活性化経費 事業成果報告書

事業区分 (3) 地域再生の核となる大学づくりに関する事業

申請組織 看護学部

申請組織長 役職名 学部長 氏名 杉浦 美佐子 印

統括責任者 役職名 教授 氏名 早川 幸博 印

課題名 大学から発信する地域で認知症の人たちを支える仕組みづくり
－ 新しい生活様式の中でより良い支援をめざして －

事業組織	役 割	氏 名	所属・役職名	役割分担
	統括責任	早川 幸博	看護学部 教授	関係各所との連携の構築
		又吉 忍	看護学部 准教授	地域での関連情報収集
		川島 一晃	看護学部 准教授	ワークショップの企画・運営
		武田 智美	看護学部 助教	認知症カフェの企画・運営

1. 事業開始の背景・経緯や目的等 (200 字～300 字程度で記述)

今後、わが国では急速に高齢化が進み、増加する認知症の人たちを専門職だけで支えることが困難な時代となる。したがって、認知症の人たちを地域の中でどのように支えていくかが重要な課題となっている。

本事業では、本学で地域に貢献することができる人材を養成すること、屋外での認知症カフェやノルディックウォーキングのイベント開催などにより、新型コロナウイルス感染拡大下であっても高齢者や認知症の人たちが社会との交流を確保すること、運動習慣形成や食生活改善を促す取り組みにより、高齢者や認知症の人たちの心身の機能低下を予防すること、本学の学生がそれらの取り組みに参加することで高齢者支援、認知症への理解・関心を高めることを目的とする。

2. 事業方法（特色・独創性）等 (300 字程度で記述)

愛知県内で、大学に所属する教員が講師となり、認知症サポーター養成講座を開催する例は他では見られない。また、認知症サポーターを組織化し、地域での認知症の人たちを支援する活動への参加をコーディネートすることにより、地域の互助・自助機能の醸成を促すことを試みるという取り組みは行われていない。

本事業では、星が丘テラスを運営する東山遊園や UR 都市機構と協働し、街づくりという観点から、高齢者や認知症の人たちが暮らしやすい生活環境を整備するとともに、高齢者や認知症の人たちの運動への動機づけ・栄養摂取状況の改善・住民間の交流の活性化を図る様々な催しを開催している。街づくり、運動、栄養、人と人との交流といった多角的な視点から高齢者と認知症の人たちの支援に取り組むことが本事業の特色である。

3. 事業の成果 (600 字～800 字程度で記述)

今年度、本事業に関連して、以下の成果があった。

- (1) 令和 4 年 5 月 29 日、UR 都市機構と本学との連携協定にもとづいて、大学近隣の集合住宅（アーバンラフレ星が丘）に居住する高齢者を対象として、ノルディックウォーキングを行った。コースは東山動植物園までの 4 km 程度の距離とした（下図参照）。本企画に看護学部学生 3 名がボランティアとして参加した。



- (2) 令和 4 年 8 月 3 日、学内において、本学看護学部在籍学生を対象として、認知症サポーター養成講座を開催した。
- (3) 令和 4 年 11 月 13 日、東山遊園と本学との連携協定にもとづいて、星が丘テラスにおいて、認知症カフェを開催した。看護学部の学生 4 名がボランティアとして参加した（下の写真・ポスター参照）。



- (4) 令和 5 年 2 月 9 日、UR 都市機構と本学との連携協定にもとづいて、大学近隣の集合住宅（アーバンラフレ星が丘・虹ヶ丘西）に居住する高齢者を対象として、本学教育学部調理室を会場とした健康長寿食の企画を、管理栄養学科の河合潤子准教授の指導により開催した。看護学部・管理栄養学科の学生 3 名がボランティアとして参加した。（下の写真参照）



本事業での取り組みは、大学が地域での核となっており、大学の人的資源を有効に活用することにより、地域の高齢者や認知症の人たちを支援するための実効性のある仕組みづくりの端緒となる可能性がある。また、学生たちが、大学在籍中から、高齢者や認知症の人たちを支援する取り組みの運営スタッフとして、地域での生活を支援する視点を持って身近な高齢者と接することは、豊かな人間性を涵養する上で意義があり、本学の「人間になろう」という教育目標と合致するものと考えられる。

4. キーワード（本事業のキーワードを1つ以上8つ以内で記載）

① 高齢者	② 認知症	③ 認知症サポーター	④ フレイル
⑤ 介護予防	⑥ ボランティア	⑦ 超高齢社会	⑧ 持続可能な地域づくり

5. 事業の達成状況及び今後の課題（事業の達成状況を踏まえて、課題、反省点、及び今後の取組みを具体的に記載すること。）

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、当初の計画を縮小した形での開催となったが、今年度も学内において、本学学生を対象として、認知症サポーター養成講座を開催し、これまでに本事業において、50名程度の認知症サポーターを養成できている。

今年度は、屋外での認知症カフェやノルディックウォーキングの開催などにより、新型コロナウイルス感染拡大で抑制されている高齢者や認知症の人たちを支援する取り組みを活性化する活動を展開することができた。

また、高齢者の身体機能低下による虚弱（フレイル）を予防するためには、適切な栄養素と蛋白質の摂取が必要であるが、簡単で美味しい健康長寿食レシピにより参加者が自ら健康長寿食を調理し、適切な栄養摂取の重要性について理解を深めることを目的とする調理イベントを開催することができた。

一方、認知症サポーターを組織化し、地域での認知症の人たちを支援する活動への参加をコーディネートすることにより、地域の互助・自助機能の醸成を促すことについては、これまでに十分には達成できていないため、地域包括支援センター等と協働して取り組んでいくことが今後の課題である。